

た。ここで地域差を定める真の平年値とは何か、又気温についても資料の取扱い方をかえて分析し、他要素からも気候区の種類を検討した結果を次報にのべご批判とご教示を賜りたい。(1960. 8. 20)

参 考 文 献

- 1) 藤原咲平, 中田良雄(1960): On the Persistence of Weather, 中央気象台欧文彙報, 3. 27~34.
- 2) 倉石六郎(1933): 東京に於ける月平均気温について, 気象集誌. II. 11. 512~519. 中央気象台彙報. 6. 302~309.
- 3) 辻村太郎著(1938): 新考地形学 (1. 2巻), 古今書院.
- 4) 野呂恒夫(1955): 東北の気候 (2報, 4報) 気温篇, 前掲.
- 5) 農林省新潟統計調査事務所編(1955): 統計からみた新潟県の米.
- 6) 新潟県農事試験場篇(1955): 新潟県農業地図.
- 7) 野口弥吉訳(1958): アツチ農業生態学, 朝倉書店.
- 4) 齊藤鍊一, 荒井隆夫編(1959): 全国農作物栽培分布図説, 東京堂.
- 9) 関口武(1959): 日本の気候区分, 東京教育大学地理学教室, 地理学研究報告. III. 65~78.

日中学術交流についての経過報告

国際学術交流委員会

来る5月の総会に「日中学術交流の促進」について、別掲の議題が提案されています。(131頁参照)
昨夏以来、国際学術交流委員会が設けられて、日中学術交流について色々な活動が行われて来ました。
上記の議題について、会員諸兄の替否の判断資料の1つとして簡単な経過報告を致しておきます。

9月17日 常任理事会で国際学術交流委員会を設けることに決定、中国との学術交流に関しては当面の目標として次の3項を決定しました。(i) 日中友好協会の学術代表団に代表を送ること。(ii) 学術交流に関する公開要望書を出すこと。(iii) 機関紙を用い、相互共通の話題(梅雨、農業気象等)に関して紙上討論を行なうこと。

9月27日 神山恵三・松本誠一の両氏を日中学術代表団の団員に推せんすることに決定。

10月12日 日中友好協会理事会で神山恵三氏が気象の分野から代表団員の1人に選ばれた。

10月18日 「日中学術交流について」中国の気象学会宛要望書を送付(「天気」1960年11月号に掲載)

10月20日 神山氏訪中のための資金募集開始(12月中に、53,327円が集計された)

交流委員会で、神山氏の訪中の原則として日中の友好関係を阻害するものを取り除き、中国が国連および

WMOに加盟できる条件を作り出すよう努力することが決められた。

11月26日 神山氏羽田出発。

12月27日 神山氏帰国、「日本政府の中国敵視政策がある限り、気象交流はできないが、資料交換に関しては実際的な手はずをとりたい。また漁業に気象も大切なのでこの方面の資料も手はずをとりたいと思う」との国務院副総理の言明を伝えた。

1月18日 中国気象学会より別掲の趣旨の書簡来る。(110頁参照)

1月27日 学会主催の神山氏帰国報告会開く。

3月14日 中国気象学会宛に神山訪中の礼状及び中国気象組織がWMOに加盟できるよう、また両国の政府間協定によって日中間の安定した気象交流が行われるよう努力する旨の書簡を送付した。